



福岡ソフトバンクホークス 加治屋 蓮選手

かじや れん

Ren Kajiya

プロフィール

加治屋 蓮
1991年11月25日生まれ(27歳)
大東小、大東中、福島高校を卒業後、JR九州に就職。
13年にドラフト1位で球界入りし、今年で6年目を迎える。
ポジションはピッチャー。
184cmの長身から投げ下ろすMAX154キロのストレートと
鋭いフォークボールが武器。

- よく遊んだ場所：大東・石木田の広場
- 好きな串間の食べ物：Aコープ大東店の「豚味付けホルモン」

市民のみなさんへの メッセージ

今までたくさん応援していただいたにも関わらず、なかなか期待に応えることができませんでした。しかし、これからはその分も含めてしっかりと結果を出していきたいと思います。今シーズンは、チームの目標である「3年連続日本一」に貢献できるよう全力を尽くします。
また、自身の活躍を通して、愛する故郷・串間を全国にアピールしていけるように一生懸命頑張ります。応援をよろしくお願いします。

「くしまPR大使」に就任!

本市にゆかりのある著名人に委嘱し、市の情報発信を図る「くしまPR大使」に加治屋さんが就任しました。2月23日にキャンプ地、アイビススタジアムで就任式が行われ、市長が委嘱状と「せとか」を贈呈。

オリックス・バファローズの西村徳文さんやビーチバレーボール選手の坂口佳穂さんに続き、9人目の大使となります。



加治屋選手のお父さんに聞きました
父と息子の思い出

Q&A



Q 子どもの頃の蓮さんはどんな少年でしたか？

A 海に川に、とにかく外で遊ぶのが好きで、テレビゲームなんてほとんどしませんでしたね。

Q お父さんから見て、蓮さんはどのような性格ですか？

A やさしくておっとり。弟がいるんですけど、けんかしているところを見たことないくらいです。

Q 一緒に練習などされたのですか？

A 小学校の時にキャッチボールの相手をした程度です。私は技術的なアドバイスができないもので、監督やコーチの話をしっかり聞いておけよと、いつも言っていました。



Q 蓮さんがドラフトで1位指名されたときは？

A 本人も遠征先の大阪で食事中にチームメイトから指名を聞かされたくらいなので、私もまさかとびっくりしました。一番驚いたのは、蓮本人でしょうけどね(笑)

Q 最後に蓮さんにおメッセージをお願いします。

A 今年も、全国のホークスファンや、串間で蓮のことを応援してくれている人たちのためにも、体調にはくれぐれも気をつけて活躍してくれることを期待しています。蓮が活躍すると、色々取材を受けられるので私も自身もうれしいんです(笑)

加治屋選手へメッセージ



努力家で尊敬できる先輩。今年も大活躍を期待しています！
小中高の後輩
(高校時代のバッテリー)
たけだ ひろき
武田 浩樹さん



プロ野球選手を目指しています。全国の野球人の目標とされる選手になってほしいです。
福島高校野球部
おにつか たいが
鬼塚 大河さん



自分たちも自慢できる先輩です。今年も活躍している姿を見せてください。
福島高校野球部
やまぐち かんた
山口 菜太さん

目立たない存在だった 中学時代

小学3年生だった頃、叔父が高校



大東中野球部時代の仲間たち。右から3番目が加治屋さん

「ドラフト1位でプロ入りしながらも最初の4年間はずっと結果を出せずに歯がゆさを感じていました。このままダメだったら...と何度か思っていました」と話す加治屋さん。花が咲き始めたのはプロ5年目を迎えた昨シーズンのことでした。「メンタル、技術面での弱点を克服して、投げることに対しての勇気を持てるようになったことで、それまでは年間登板数が指で数えても足りるほどでしたが、昨年は143試合あるシーズンのうち、72試合に登板し、結果を残すことができました。1軍で投げる楽しさや厳しさを肌で感じてみて、今はこの世界で1日でも長くプレーをしたいと思っています」と闘志を燃やす加治屋さん。厳しい勝負の世界で大きな飛躍を遂げ、これからの活躍に期待がかかる選手にまで成長しました。

野球でプレーする姿を観たことがきっかけで、加治屋さんは野球を始めます。「最初は、ショートやセンターを守っていたんです。その頃から身長が高かったわけでもなかったし、体つきも細い方でした。決して恵まれた体格ではありませんでしたね」
大東中に入学した加治屋さんは、もちろん野球を続けます。中学時代は、能力の高い選手だったわけではなく、目立たない存在だったと言います。「周り比べると成長期を迎えたのが遅かったんです。私立高校から特待生として目を付けてもらうことができなかったため、福島高校に進学することになったんです」

感謝の気持ちを 忘れない

突然の死を乗り越えて
高校2年の夏、加治屋さんの耳に悲しい知らせが入ります。
夏の甲子園予選大会が開催されていたときのこと。試合が雨で順延になり、帰りの車で、それまで元気だったお母様が亡くなったことを聞かされたのです。「はじめは本当に信じられませんでした。でも家に帰ってみるといろんな準備がされてあったので、本当なんだと思いました。全身の力が抜けて立ち上がれませんでした」
そしてその翌日。父・博樹さんは「試合に行つてこい」と加治屋さんに声を掛けたとはいいます。「母が自分が野球をする姿をすごく応援してくれていたもので、そんな時でも父は背中を押してくれたんだと思います。このときに、『意地でもプロ野球選手になつてやる』と決意しました」と目頭を熱くする加治屋さん。それからメキメキと力をつけ、3年生になるとスカウトから目を付けられる選手にまで成長します。
卒業後は、プロでも通用する技術を養うため、強豪・JR九州の野球部に入部。着実に力を付けていきま

した。
そして社会人4年目の秋、ドラフト1位でソフトバンクホークスからの指名を受け、晴れてプロ野球選手になるという夢を実現させたのです。
大事にしていること
小学校以来、一筋に野球に打ち込んできた加治屋さん。これまでの野球人生を通して、「感謝」という言葉を最も大事にしています。
「まず、当たり前ですが両親にはすごく感謝しています。父に関して言えば、男手1つで自分と弟を育てることはすごく大変だっただろうなと、1児の父親になった今、改めて思いますね。」
そして、野球をできるという環境が当たり前じゃないと思つていて、いろんな人からの支えがあつて野球ができていたので、感謝の気持ちを日頃から忘れないようにしています」
そう話す加治屋さんは、グループにも「感謝」の2文字を刺繍しているほど。これからも感謝の気持ちと期待を胸に、マウンドに上がります。